様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４２０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７００６７５

研究課題名（和文）総合型地域スポーツクラブが構築する関係システムと設立運営の成否に関する質的検討

研究課題名（英文）The qualitative research on relationships between the networking of community sports clubs and their management capability

研究代表者
炭谷　将史（Sumiya, Masashi）

聖泉大学・人間学部・准教授

研究者番号：２０４１０９６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，総合型地域スポーツクラブの設立・運営の成否について，クラブが有する関係性という観点から検討をすることを目的とした．複数のクラブにおいてフィールドワークを行った結果，成功クラブは，近隣小学校との関係を良好な形で構築しているとともに，地域住民との関係をつくるべくクラブハウスを有効に活用していることが明らかになった．さらに，関係性は構築する先（ネットワークチャネル）だけでなく，関係性の質が重要であることが明らかになっている．停滞クラブは，成功クラブと比してクラブ外にネットワークを持っている人が少なく，成功クラブは，多くの人がクラブ外における「弱連結」を構築していることが明らかになった．

研究成果の概要（英文）：The purpose of this qualitative study had been discussing the successfulness of the comprehensive sports clubs by the view of the networking system. The results of the field works in several clubs have shown that the successful clubs have constructed the positive network with elementary schools nearby, and have used clubhouses effectively for making comfortable relationship with neighbors. The clubs in colleges and universities have had troubles with making connections with their administrative offices. Clubs also need to connect positively with the local governments.
Moreover, since the unsuccessful clubs have referred to the narrow networking instead of the successful clubs referring the wide range of networking by 10 or more club members, clubs need to pay attention on the quality of networking which needs to be “the weak ties”.

研究分野：運動心理学

キーワード：総合型地域スポーツクラブ　ネットワーキング　弱連結　エスノグラフィー

１．研究開始当初の背景

研究開始当初までに行われていた地域クラブに関する研究は，「クラブのマネジメントに関する研究」（以下,『マネジメント研究』とする）と「クラブの意義に関する研究」（以下,『意義研究』とする）という 2 つに大別できた．さらにテーマに関して詳しく分類した結果,「マネジメント研究」では,（１）設立・育成過程,（２）運営状況・課題,（３）特徴的な取組・プログラム,（４）会員・住民のニーズに対する調査,「意義研究」では,（１）総合型クラブの役割・効果,（２）総合型クラブの記述・理解，の下位項目に分類された（炭谷，2012）.

また，これらの研究焦点は,“総合型地域スポーツクラブの 6 つの要件”（多種目，多世代，多志向，活動拠点（クラブハウス）がある，質の高い指導者，住民主導）と３つの“期待される効果”（スポーツ実施率の向上，地域の活性化，スポーツ環境の整備）に当てられていた．このような焦点の当て方は，クラブ内部からの議論であり，クラブが順調に設立され，運営されていることを前提として，成功するための方法を議論していたに過ぎない．そこで地域クラブ研究は，より一層クラブを客体化し，客観的に検討することが必要であると考えられた.

また，後藤らが指摘している通り，これまでの「総合型」論は,「あくまでも設立を前提とした議論がほとんどであった」ため,「育成に関わる人々の主体的な実践や相互作用については等閑視される傾向にあった」（後藤，2006）．地域クラブを中心としたスポーツ環境を生成していくためには，設立・育成・運営に関わる人々の主体的実践や相互作用を対象とした仮説生成型の研究が必要だと考えられた．たとえば，設立・育成に失敗したクラブもしくは一時期活発に活動をしていたが現在は停滞しているクラブの失敗理由や設立過程の課題を検討した研究は見当たらないし，総合型というスタイルを採用する必要が本当にあるのか？などを問う議論も見当たらなかった.

さらに，地域クラブに関する先行研究の多くは社会学や経営学の観点から行われてきたものが多く，参加する人や運営する人たちにとって地域クラブがどのような役割を担い，その人たちの人生にとってどのような意義・意味があるのかを明らかにした研究はほとんど見当たらなかった.

２．研究の目的

先行研究におけるこれらの課題を踏まえて，本研究の第一の目的は，活動が活発なクラブだけではなく，停滞しているクラブ関係者を調査対象者として研究を遂行することとする.

第 2 の目的は，クラブの関係性構築の観点から活発なクラブと停滞しているクラブの違いを明らかにすることである．そして，その結果から地域クラブの設立と充実した活動に有効な提言を行うことを目的とするものである.

第 3 の目的は，クラブを運営している人びとにとって，クラブに関わることがその人たちにとってどんな意味があるのかについて検討することである.

３．研究の方法

本研究は，質的な研究手法を主に用いて行われた．特にフィールドワークによる観察と半構造化面接の手法を使ったインタビュー調査を中心にデータを収集した.

それまでの総合型地域スポーツクラブを対象とした先行研究は,マネジメントに焦点を当てたもの とクラブ設立の意義・意味を明らかにしたものに分類できた(炭谷，2012)．マネジメント に焦点を当てたものの中では, 住民や会員のニーズを調査したものが多く，そのほとんどが質問紙による調査であった．また，クラブ設立の意義・意味を明らかにした先行研究には，健康の維持・増進やスポーツ活動量の増加といった，いわゆる「効果」によって明らかにしたものがあった．これらはクラブの一面を映し出してはいるものの，会員や運営する立場の人間の苦労，生き生きとクラブライフを楽しむ姿，活性化を果たした際の現場の具体性を伝えているとは言い難い.

小田(2010)は，現場（フィールド）を「人びとが何かを実際に行っている場」,もしくは「ある事がらが実際に起きている場」とし，その特徴について，現在進行性，予測不可能性，即興性，具体性，複雑性という5つを有するとしている．総合型地域スポーツクラブの現場（フィールド）では,「いま」まさに何かが起こっている（現在進行性）．その「いま」は,「これまで」起こってきた事実と「これから起こる」予測不可能な未来の間にある（予測不可能性）．その予測不可能な「いま」に直面かした人々（会員や指導者,運営者たち）は，即興的に行動し，その行動が予期しなかった結果やさらなる変化を生みだす（即興性）.

このような具体的で，一回的な事例は，その中に真実を包含し,時に既存の考え方を揺さぶることすらある（具体性）．そして，1つの現場（フィールド）は多くの人物や文脈が絡みあって成り立っており，原因と結果を明瞭に分類することは時に困難である（複雑性）（小田，2010）．総合型地域スポーツクラブが多くの人びとによって何かが生み出されている場，すなわち現場（フィールド）であるとするなら，質問紙調査や効果（取り組みの結果）の比較だけでその真実の姿を理解することは難しい.

なお，活発クラブと停滞クラブの選別は，クラブに関わっている人たちの主観的評価によって行われた．すなわち，課題はあるものの比較的活発に活動を展開できていると把握しているクラブを「活発クラブ」，課題が多く，活動は停滞していると考えているクラブを「停滞クラブ」と考えた．そのため，クラブの規模やサークル数などに基づいた分類ではない．

収集されたデータ（フィールドメモ，写真，インタビューデータ）は，フィールドノーツにまとめられた．その後，エスノグラフィーの手法を用いてまとめられた．

４．研究成果

3 年間の補助期間に行った研究活動の結果，明らかになったもしくは今後明らかにする仮説的知見は以下の通りである．

⑴　従来，地域クラブの対象エリアを中学校区程度とするという考え方が一般的だったが，実質的には小学校区が対象エリアとなっているクラブが多かった．そのため，近隣小学校との良好な関係づくりが大切であり，小学校が地域と結び付く入口としての役割を有していることが推察された．すなわち，クラブにとって小学校が「地域への玄関」であると言えた．

図１　近隣小学校の地域玄関

⑵　地域住民と良好な関係性を構築するために，クラブハウスは単に事務所のような機能を果たすだけでは不十分であると考えられた．

クラブハウスは老若男女全ての会員にとって居心地の良い居場所，すなわち「ホーム」としての機能を果たすことが肝要であると考えられた．

図２　クラブハウスの「ホーム」な雰囲気

⑶　大学を拠点として地域クラブを運営する場合，大学本部との良好な関係性の構築が非常に難しく，協力を得るために学長に対するプレゼンを行うなどの工夫をしていた．また，学生の学びと連動させるために地域クラブの活動とカリキュラムが連動することも大切であることが考えられた．

⑷　活発なクラブは，クラブ外との多様なネットワークを構築しており，特に全国的な競技団体や地域クラブの連絡協議会といった中間支援組織との「弱連結」を多数有しているという特徴があると考えられた．

⑸　また，多様なネットワークを有する人の数もクラブの活発化には影響を及ぼしていると考えられた．すなわち活発クラブはクラブ外のネットワークを持っている人が複数（多いところは10名以上）在籍したが，停滞クラブは，ほぼ全てのネットワークを特定の人物が有しており，ネットワーキングが限定的であった．

⑹　特に在籍する自治体との連携は重要であり，停滞クラブの中には，クラブ設立が自治体主導で行われたにも関わらず，設立後に自治体によって動きを制限される事例があった．そのため，設立時の経緯とは関係なく，自治体が積極的に協力してくれる関係性を構築するようなクラブ側の積極的な働きかけが必要であると考えられた．

上記のようにクラブが関係を結ぶ必要があるチャネルとして小学校，クラブ外の組織（特に中間支援組織），大学本部，自治体などが考えられた．また，クラブ活性化のポイントとしてチャネルよりもむしろその関係の結び方が大切であることが読み取れた．すなわち，クラブ内外での強い連結というよりも緩やかな連携をクラブの多くの人が持っていることが大切であることがポイントであることが明らかになった．

今後の研究課題は，より多くの人がクラブに関わってくれるための方策を明らかにすることであろう．より多くの人がクラブ外にネットワークを築くためには，積極的にクラ

ブ運営に関わりクラブ外の仕事をするような人が多くなければならない．本研究期間に明らかになったことを土台として，今後さらなる研究を遂行しなければならない．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2　件）

1）　炭谷将史　大学を核とした地域密着型スポーツクラブの意義と課題〜大学側の視座からの考察，聖泉論叢，Vol.21,2013，25-34．査読なし
http://ci.nii.ac.jp/naid/120005613216

2）　炭谷将史　総合型地域スポーツクラブの活性化に関する質的検討~近隣住民との関係性構築の観点から~ ，聖泉大学スポーツ文化研究所紀要，vol.5, 2012, 19-27.　査読なし
http://ci.nii.ac.jp/naid/40019781912

〔学会発表〕（計　1　件）

1）　Masashi Sumiya　The study on Japanese comprehensive sports clubs -Their characteristics in social network management as a community developing social devise-, the International Journal of Arts & Sciences conference for academic disciplines, 2013年03月04日~2013 年03月07日, MALTA.　査読あり